

11 月23日より企画展「君たちはどう生きるか」第三部背景美術編が始まりました。今回展示されるのは約120点の背景美術です。青鷲屋敷、大伯父の塔、ヒミヤキリコがいるもう一つの世界など、映画の舞台をご覧ください。

館内では常設展示室にも背景美術を飾っている部屋があります。「世界をつくる所」、通称「少女の部屋」です。「麦わら帽子をかぶり、自転車に乗って颯爽とスケッチに出かける少女」の部屋をイメージして作られた展示室です。少女が描いたという想定のもと、机の周りや壁には映画の背景画や美術ボードが張り巡らされています。「アニメーション映画の品格を最終的に決めるのは美術である」と宮崎駿監督は語ります。世界を絵の中に取り込みたいという思いから描かれた数々の絵を、ここでも間近にご覧いただけます。

第三部は半年ごとに前期、後期に分け、絵柄を半分近く入れ替えて開催いたします。これまでのジブリ作品の背景美術と、最新の背景美術を合わせてご覧いただけたら嬉しく思います。



季刊トライホークス 2024年 | 77号
発行日……2024年12月7日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
編集……石光紀子 小泉奈里子 | デザイン……川島弘世
印刷……TOPPANクロレ株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置いているおすすめの本を紹介しています。
トライホークスの本棚の一冊から、みなさんの本棚の一冊にいただけたら嬉しいです。

輪切り図鑑 クロスセクション

この秋嬉しい復刊がありました。『輪切り図鑑クロスセクション』が新装版として復活したのです。この本では18の建物や乗り物が端から端まで全て輪切りにされて描かれています。以前の本よりひとまわり小さくなっているのは残念ですが、織り込まれたワイドページも普通通りで、4ページを使って描かれた大洋航路客船や汽車の絵は迫力があります。詳細な説明もついています。絵を見ているだけでも楽しいので、まだ字の読めない小さな子どもたちから大人まで大人気の本でした。長らく品切れが続いていましたが、情報がアップデートされ、訳文も見直され、装いを新たに再登場しました。

輪切りの何が楽しいかというと、普段見ることができない場所をつぶさに見ることができ、建物の構造はもちろん人の動きが見えるところです。それが昔の建物であればなおさら興味深く、例えば「キャッスル(城)」のページには城の地下牢から屋根裏まで、そこで働く人も描かれています。生活するならトイレは絶対必要のはず、昔のトイレはどんな所だろう？ 城主の部屋や調理場はどこだろう？ ひとつひとつの部屋やその位置を確かめながら、城の暮らしを眺めていると、どんどん楽しくなってきます。さらに「ぼっとん」「じゃぶじゃぶ」「ほんとうにくさい」、こんなタイトルのついた説明文もあり、物の説明だけでなく場所の匂いや音まで想像できます。

城以外にも、潜水艦やジャンボジェット、海底油田に自動車工場まで、様々なものを観察できるおもしろさ満載の本です。まずはページをめくって、中をのぞいてみてください。



新装版
輪切り図鑑
クロスセクション
18の建物や乗物の
内部を見る
画……
スティーヴン・ピースティエ
文……リチャード・ブラット
訳……北森俊行
岩波書店 2,970円

伊与原 新

Shin Iyohara

夢中になって読んだ本

国立天文台の方に教えてもらった「星」にまつわるおすすめの本、その中の一冊が『月まで三キロ』です。地球惑星科学の研究者でもあった伊与原さんの小説には、科学的な知識が織り交ぜられおり、自分が見えている世界が全てではないこと、物の見方が無数にあることを優しく示してくれます。伊与原さんご自身が夢中になって読んだ本とともに、ぜひご覧ください。



©新潮社

* * * * *

今 私には小学生の息子が2人いる。月に数回、彼らを連れて近所の公立図書館へ本を借りに行くのだが、その度に暗澹たる気持ちになる。児童文学のコーナーが、魔法ものと心霊ものでほぼ埋めつくされているのだ。もちろん、ファンタジー小説にも優れた作品がたくさんあることは知っている。それでも、子どもたちに提供される物語が、異世界や非科学的な世界を描いたものばかりに偏っていていいとは思えない。

私が小学生の頃には、学校の図書室にも近所の図書館にも、児童向けのSFや科学冒険ものが数多く並んでいた。3、4年生のとき、なるべく長い物語に挑戦してやろうと借りてきたのが、ジュール・ベルヌの『海底二万海里』だ。福音館書店刊の分厚い本で、奇妙な生物がうごめく海底を描いた装画にもやけに心惹かれた。続いて同シリーズの『二年間の休暇』なども読み切ったが、中身をあまり覚えていないことからすると、そこまで面白いとは思わなかったのだろう。ただ、この時期にこうした長編を数冊読破したことで、読書の“基礎体力”とでもいうべき力と自信が培われたのは間違いない。

その後、5、6年生になってまさに夢中になって読んだ作品が一つある。ジョン・クリストファ

一の「三本足シリーズ」である。『鋼鉄の巨人』、『銀河系の征服者』、『もえる黄金都市』からなる3部作で、ジュブナイルSFの金字塔ともいわれていたが、残念ながら今では知る人も少ないようだ。舞台は、異星人が操る巨大な機械「三本足」に支配され、文明が後退してしまった地球。人々は14歳になると「三本足」によって「頭の輪」を取り付けられて、自由な意思を失ってしまう。そんな中、「頭の輪」の装着から逃れ、「白い山脈」に隠れ住んで人類の自由を取り戻そうとする人々が少数ながらいた。主人公の少年ウィルは、仲間とともに「白い山脈」のレジスタンスに加わり、強大な「三本足」との戦いに挑む——という冒険活劇である。最近のSFエンタメ作品と比べても遜色のない凝った設定と、勇気、努力、友情、自己犠牲といった少年マンガ的要素を盛り込んだ骨太なストーリーに魅了され、私は一時期この小説にどっぷりはまり込んだ。ハヤカワ文庫から「トリポッド・シリーズ」として新訳版も出ているので、興味のある方はぜひ読んでみていただきたい。大人も十分楽しめる傑作である。

児童書とは言い難いかもしれないが、私の進む道に強く影響を与えた本がもう一冊ある。ジョージ・ガモフという著名な物理学者が書いた『不思議の国のトムキンス』だ。白揚社から出た箱入り

の本を、中学1年のときに科学好きの父がプレゼントしてくれた。ガモフは1920年代から40年代にかけて宇宙論や素粒子物理学の分野で世界的な業績をあげた人物で、難解な現代物理学を一般向けに解説した啓蒙書を多く著した。『不思議の国のトムキンス』はその代表作で、主人公のしがない銀行員トムキンス氏がタイトルのとおり、ことあるごとに不思議な世界に迷い込む。自転車で走れば平べったく縮み、ビリヤードをすれば球がぼわっと広がってしまう。奇妙な体験ばかりするそれらの世界では、相対論や量子力学の効果が極端に大きくなっていったのだ。驚くだけのトムキンス氏に「教授」が理屈を説明するというスタイルで進む物語は、小説とも解説とも違う風変わりな読み味で、人間の直感だけではなかなか捉え切れない物理学の不思議さを中学生の私に教えてくれた。数式は一切出てこないの、科学や数学に苦手意識がある方でも十分に現代物理学のエッセンスが味わえるだろう。

最後に、子ども時代に読んだものではないのだが、大好きな絵本を一冊紹介したい。はぎわらぶぐさんの『火山はめざめる』。題材となっている火山は、長野県と群馬県にまたがる浅間山だ。この山が過去に繰り返してきた噴火のうち、昭和時代、江戸時代、平安時代、2万5000年前の4つの大きな噴火の様子が、周辺で生きる人々の暮らしぶりや被った影響とともにリアルに描かれている。浅間山を専門とする火山学者、早川由紀夫氏の監

修を受けているので、科学的にも正確な学びが得られるだろう。日本人は火山とともに生きてきた。軽んじてはもちろんいけないが、ただ恐れるだけでもいけない。火山の国に暮らす我々が知るべきことを温かみのある絵で伝えてくれる、稀有な絵本である。

人類の知の地平を広げ、現実世界をより良いものにする可能性を持っているのは、魔法ではなく科学だ。そして、科学の世界は魔法の世界以上に“ワンダー”に満ちている。それを子どもたちに伝えてくれる物語が少しでも増えることを切に願う。願っても叶わないのであれば、私が書くしかないのかもしれない。

いしはらしん

1972(昭和47)年、大阪生れ。神戸大学理学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科で地球惑星科学を専攻し、博士課程修了。2010(平成22)年、『お台場アイランドベイビー』で横溝正史ミステリ大賞を受賞。2019年、『月まで三キロ』で新田次郎文学賞、静岡書店大賞、未来屋小説大賞を受賞。他の著書に『八月の銀の雪』『宙わたる教室』『オオルリ流星群』『青ノ果テ 花巻農芸高校地学部夏』『博物館のファントム』『蝶が舞ったら、謎のち晴れ 気象予報士・蝶子の推理』『ブルーネス』『コンタミ 科学汚染』など、最新刊に『藍を継ぐ海』がある。

トライ
ホークス
の本

月まで三キロ
著…伊与原 新
新潮文庫 781円



鋼鉄の巨人
「三本足」シリーズ1
作…ジョン・クリストファー
訳…亀山龍樹
学習研究社 絶版



銀河系の征服者
「三本足」シリーズ2



もえる黄金都市
「三本足」シリーズ3



不思議の国の
トムキンス
著…ジョージ・ガモフ
訳…伏見康治
白揚社 1,650円



火山はめざめる
作…はぎわら ぶぐ
監修…早川由紀夫
福音館書店 1,650円

- ◆ 海底二万海里 作…ジュール・ベルヌ 訳…清水正和 福音館書店 2,750円
- ◆ 二年間の休暇 作…ジュール・ベルヌ 訳…朝倉 剛 福音館書店 2,530円



中川李枝子さんのこと

今年の10月14日、作家の中川李枝子さんがお亡くなりになりました。映画「となりのトトロ」の主題歌「さんぽ」の歌詞を書かれるなど、スタジオジブリとの縁が深いのはもちろんのこと、美術館にとってもオリジナル短編アニメーション「くじらとり」「たからさがし」の原作者であり、美術館パンフレットへの文章の寄稿、子どもをテーマとした館内イベントにも出演していただくなど、縁の深い方です。図書閲覧室トライホークスでは、中川さんと妹の山脇百合子さんが作られた本がいつでも部屋の中心にあります。今回はそんな中川さんにつながるものをいくつかご紹介したいと思います。

映画のこと

“美術館を訪れた子どもたちが何かひとつでもおもしろいと思ってくれるものを作ろう”それが美術館の目標です。スタンドグラスから差し込む色のついた陽の光、細長いカゴ状の螺旋階段、誰かの家のお部屋をのぞいているような展示室、姿をあらわしたネコパスに、短編映画や図書室の本もそのひとつです。映像展示室「土星座」の1作品目の上映は「くじらとり」でした。1962年に出版された『いやいやえん』を、まだアニメーションの仕事にもついでない、学生だった宮崎駿監督が読み、アニメーションにしたいと思ったお話です。通常の作画枚数をはるかに越えて作られた映画は、子どもたちの動きが丁寧に描かれていますので、ぜひご注目ください。そして、中央ホール吹き抜けの天井には「くじらとり」がモチーフになった「くじら」の絵のフュージングガラスがはめ込まれていますので、天井にも目を向けていただけたらと思います。

9作品目にあたる「たからさがし」は2011年の6月に初上映されました。東日本大震災の直後でもあり、いらっしゃるお客様がまばらな時期がしばらく続きましたが、その中で上映されたのが「たからさがし」です。ゆうじとウサギのギックが「棒」をめぐって、かけっこして、ジャンプして、最後は仲良くお茶をするというシンプルなお話の映画ですが、それがかえってざわついていた雰囲気や気持ちを沈めてくれたような気がします。子どもたちにとっては、ゆうじとギックと一緒に、走る、食べる、を楽しむ

る映画です。

本のこと

この図書室を作るときに宮崎監督がまず選んだのが『いやいやえん』と「ぐりとぐらシリーズ」（福音館書店）でした。「『いやいやえん』は傑作です。子どもの姿がこれほど鮮やかに描かれている本はない」と力説していました。以来、『いやいやえん』は常に本棚にあり、「ぐりとぐらシリーズ」は、夏に『ぐりとぐらのかいすいよく』、クリスマスには『ぐりとぐらのおきゃくさま』と季節に合わせた本を置き、手に取られることで傷んでしまう見本を何度も作り直しながら今に至っています。美術館が開館し20年以上たちますが、「懐かしい!」と手に取る大人の方や、読み聞かせてもらっている子どもたちの姿をずっと見続けてきて、読みつかれていく本の様を目の当たりにできたことは、幸せなことだと改めて思います。

また、中川さんには2005年秋に出した季刊トライホークス第3号でも本を紹介していただきました。インタビューに伺ったご自宅のリビングには「岩波少年文庫」の本棚があったことが今でも思い返されます。新潮文庫や岩波文庫を愛読していた少女時代に始まり、当時も新刊のチェックを怠らず読書ノートをつけていた中川さんが選んだのは「私も夢中になって読んだ、若い人たちにぜひ読んでもらいたい本」でした。エリナ・ファージョンの『リンゴ畑のマーティン・ビビン』『ムギと王さま』（岩波書店）といったトライホークスでもおなじみの本の他、お好きだと話していた中勘助、シャルル＝ルイ・フィリップ、ディケンズ、ヘンリー・D・ソローの本も紹介していただきました。今読んでいる本や好きな作家のこと、人物ひとりひとりがくっきりと浮かび上がる翻訳のことや、日本語の美しさについてなど、時間が許せばもっとお話を聞きたかったと思うひと時であり、これらは今でも図書室の大切な本です。

これからもたくさん子どもたちが、中川さんの作品を読むことと思います。そして、この図書室はそんな子どもたちに本を手渡す場所であり続けたいと思います。とても素敵な作品をどうもありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。



いやいやえん
作…中川李枝子
絵…大村百合子
福音館書店 1,430円
★「くじらとり」含め
7つのお話を収録